

まえがき

私が The Beatles の音楽を初めて耳にしたのは、日本におけるレコードデビューの直後。1964年3月、中学二年が終わった春休みのことだった。ラジオから流れてきた I Want To Hold Your Hand にしびれて、翌日レコード店へ飛んで行った。すぐにまた聴きたかったからだ。初めて手にしたドーナツ盤。その後、ビートルズのものに加えて、他の英国のビートルグループの旧作および新作レコードも続々と発売されたが、私は彼らの音楽とファッションのみならず、彼らの言葉である英語に大きな興味を抱くようになった。好きになると勉強ははかどるもので、高校でも大学でも英語の成績は常に最上位。レコードの歌詞に親しみ、その多くを暗記していたことも役立ったと思う。社会人になってからは、英語を主たる道具とする輸出業務、国際業務、翻訳業務などに従事。そして私のビートルマニアは、バンドの解散にもめげず、レノンとハリソンの死も乗り越えて、今でも続いている。

2007年の夏、私は“ビートルズ英語読解ガイド”という本を著した。本書の前身である。老練なビートルマニアックが、なぜ今さらのように執筆を行ったのか。それは、1980年代以降に日本で発売されたレコードの歌詞カードや図書にどのような記述があるか知らなかったからだ。1967年6月発表のアルバム SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND 以来、新譜を一刻でも早く手にしたい私は、アメリカから航空便で入荷する輸入盤を買っていた。当時は日本発売が二カ月前後遅かったのだ。CDも米国盤で揃えた。日本盤に付属する、あたかもすべて自分で調べたかのような言い方の説明書や、間違いだらけの歌詞カードなら、無い方がましという思いもあった。また、書籍も、英米で発売された信憑性のありそうなものを原書で読むだけで、典拠を明らかにしていないものや、日本語に焼き直されたものには関心を払わなかった。私にとって新しい正確で重要な情報はないと考えていたからだ。加えて、誤訳の可能性がある。

そうこうするうち、2005年になって、書店の店先でたまたま見かけたビートルズ関連図書をめくって、驚いた。掲載されている歌詞の誤訳の多いこと。各CDに付属する歌詞リーフレットはどうかと調べてみたら、その対訳にも誤りがたくさんあっ

た。それどころか、歌詞自体の聴き取りが正しく行われていない箇所もあちこちで見つかった。レコードが最初に発売されてから40年前後の時が経っているというのに、このような稚拙や誤謬が依然として、しかも公式CDのパッケージにまで、まことしやかに記されているとは。ビートルズの歌詞が正確に理解されず、そのために彼らの考え方が誤解されたり、その文芸の持つ価値が正当に評価されていなかったりするような現状を知って、彼らを愛する私は行動を起こす決心をした。

不十分であったり不正確であったりする情報が既に日本の隅々まで蔓延していると思われる中、正しい読解をどのように広めたらよいのか。問題点の結論を単に指摘するだけでは、通説になっている間違いを駆逐することは不可能であろう。そこで、私の歌詞解釈の正当性もしくは合理性を、初歩からの英文法解説を交えて著述することにした。学問性を併せ持たせることによって説得力を高める試みである。そして、私がこのようなアプローチを取ることによって、ビートルズ音楽の愛好者は、ビートルズへの理解を深めるのみならず、楽しみながら英語学習を行うことができるはずと考えた。そして誕生したのが“ビートルズ英語読解ガイド”。彼らがレコーディングアーティストとして活躍した最初の五年間に発表したオリジナルナンバー107曲を取り上げた。本書の原初版である。

それから五年。その間、思いつくたびに内容を考察し直し、実際に二度の改版を行った。しかし、まだ説明が足りない部分があることに気付いた。既に余白は残っていないので、新たな説明を加えるにはページ数を増やすしか手立てはない。この増補版では、最初の107曲の解説に、原初版よりも33ページ多い、165ページの紙面を使用している。文字・単語数の増加はおよそ35パーセントである。

さらに、増補版の名に値するように、12ページを追加して、新たに12のビートルズ作品を取り上げている。THE BEATLES ANTHOLOGY シリーズに収録された中の10曲と他の2曲である。ゆえに、本書は、既に原書を読んだ人にも満足してもらえるのではないだろうか。

本書が読者の役に立てば幸いである。意見などがあれば、聞かせて欲しい。異論や私の知らない情報は、特に歓迎する。

最後に、本書執筆の原点を振り返ると、私にとって忘れてはならない人がいる。我が家のステレオ装置を私がほぼ独占することに目をつぶってくれた両親。そして都立石神井高校において英語学習を厳しく指導してくださった田中貴美夫先生に、あらためて感謝する。

2012年8月
秋山直樹

本書の特色と利用法

本書で扱うのは、まず、The Beatles がレコーディングアーティストとして活躍した八年間のうちの最初の五年間に発表したオリジナルナンバー107曲の歌詞。発表順に読んでゆく。この時期には非オリジナル25曲もレコード化されているが、これらは外した。そうしないと、内容の一貫性と歌詞発展の歴史性に欠けてしまうからである。そして、同時期に録音されながら後年まで正式には発表されなかったオリジナルナンバー12曲を加えた。

実際、ビートルズが書いた歌詞をレコードの発表順に追うと、彼らの作詞力と共に作文力の進歩がよく分かる。デビュー曲の骨子は三つの短文と三つの名詞句で、使われている単語は正味18語にすぎない。文章が複雑化し始めるのは、24曲目から。そして60曲目を過ぎると、抽象的や比喩的な表現が増え、社会的テーマ、文学的描写、哲学的思考などが、単なるラブソングに取って代わる。このように、出だしが簡単で段々と難易度が上がるというのは、副次的なことだが、語学教材として理想的である。

しかも、仮定法を含む各時制（未来完了、未来完了進行形、過去完了進行形を除く）、各種動詞、各助動詞（dareを除く）のさまざまな用法、各関係詞、両話法といった基本英文法の文例が、くしくも最初の95曲までに登場している。そして119曲で学べる英単語の数はおよそ1020。動詞の不規則活用形、助動詞の変化形、形容詞の比較変化形、名詞の不規則複数形、固有名詞、間投詞、短縮語などを合わせる

と、およそ1200に上る。その大部分は日常的に使われる言葉である。

歌詞の全文を、メロディーやリズムにとらわれずに、普通に文章を書く体裁で本書に掲載できればよいのだが、著作権の観点から見送っている。歌詞のもっと広い部分なり全体像を眺めるには、CD付属の歌詞リーフレットや、市販されている詩集や楽譜などを参照して欲しい。本書はそのような出版物の代りになるものではない。

全文の翻訳は、できれば、読者が自ら訳したものを紙に書いてみるのがよいだろう。自分の和訳を文字にしてまとめるうちに、実際には解っていなかったことに気付くものである。そこでさらに考える。このように、他人の言葉で書かれた翻訳を媒体にしないで、自分の頭で考えて、英文を理解することが肝心である。そうした訓練を続けるうちに、英語がそのまま解けるようになる。すると、ビートルズが書いた歌詞に含まれるユーモアなども楽しめることになる。例えば *And Your Bird Can Sing* や *Got To Get You Into My Life* は、公式に出回っている対訳からでは、面白さや隠れた意味を半分も理解することができない。

本書の記述の仕方について説明しておく。歌詞の中の語句に直接的に言及する際は、イタリック体（例えば *Love, love me do.*）にしてある。〈tell somebody of something〉のように、〈 〉でくくってあるものは、言い回しなどの基本的な構成を示している。〔 〕内の数字は、本書における作品番号。「 」で挟んであるのは、私の訳語。一方、他書からの引用の前後には、『 』を用いた。また、著作物の題名は、英語のものは大文字だけで記し、日本語のものは“ ”でくくってある。

文法用語がたくさん出てくる。知能が十分に発達した後に外国語を習得するには、体系的で能率の良い学習が助けになると考えるからだ。そして、私からのアドバイス。ありふれた英和辞典で構わないので、頻繁に辞書を引く習慣をつけること。たとえ基本単語についてであっても、自分の記憶に100パーセントの自信がない場合は、面倒臭がらずに辞書をめくる。その積み重ねが必ず英語力の向上に繋がる。

また、音読を心がけるべきだ。そしてその際、音ごとの口の形と舌の位置が正しいことに注意し、各音の違いを耳で確認することが肝要である。この訓練は聞き取りにも役立つ。